

論文審査の結果の要旨

李セボン

本論文『中村敬宇の思想－幕末・明治初期における儒学的「道」の展開』は、明治初期の知識人として名高い敬宇中村正直について、その儒者としての一貫した歩みに初めて内面的かつ系統的な理解を試みた研究である。

従来、中村正直は、漢学者でありながら明治初期に「明六社」に加入し、活発に活動した啓蒙知識人、福澤諭吉の慶應義塾と並び多くの学生を集めた学塾「同人社」を運営した洋学教育者、明治初期のベストセラー、サミュエル・スマイルズ原著の『西国立志編』やジョン・ステュアート・ミル原著の『自由之理』を刊行・紹介した翻訳者、そして初期のキリスト教入信者の一人と見なされてきた。生前は福澤と並ぶ名声を誇り、現在もその名は高校の歴史教科書に載るほどであるが、その人物像はこれまで曖昧で、明確なイメージを結んでいない。

本論文はこのような研究状況に対し、従来は等閑に附されてきた幕末から明治にかけての漢文著作を丹念に読みほどこき、その結果、彼が一貫して儒学を奉じていたこと、かつそれを新時代にふさわしい「敬天愛人」の教説に発展させて教育・著作に携わっていたことを明らかにした。全体は、序章と終章のほか、6章からなっている。以下、章ごとにその内容を紹介する。

序章では、先行研究の問題点を指摘し、研究の基軸を定める。従来の研究では第一に、敬宇は「啓蒙」知識人の一人と見なされ、そのために終生朱子学を奉じていた彼は、あるべき西洋的「近代」という視角から見て「不完全」な思想家だと解された。また、キリスト教史の視角からの研究は、キリスト教への接近と離反という物語に格納するのが主流で、彼の思想の内面的理解は閉ざされてきた。さらに、その翻訳については、後世の西洋思想史理解に基づいて彼の誤訳や偏りを指摘することがしばしばで、やはり敬宇が翻訳に籠めた意図は顧みられることがなかったという。

第1章は幕末を扱う。敬宇は幕府同心の家に生まれ、昌平黌に学んで、幕末の政治的動乱が始まった後、31歳の若さでその儒者に取り立てられた。この時代の彼については、従来、漢学者でありながら蘭学も学び、かつ様々な時務策を献じたという「折衷」

性が強調されてきた。しかし、著者は、彼の時務策が、昌平黌を中国の「科挙」のごとき徳川公儀への「人才」供給源とすることを主眼とし、洋学や「武事」の学習も「格物致知」の一つと位置づけていたこと、つまり朱子学の核心思想に立脚していたことを指摘する。敬宇はさらに「五倫」を人類普遍の道德と考え、これを特殊化する水戸学の「国体」論を批判した。敬宇の同時代人と比べての特徴は朱子学の普遍性への確信にあったという。

第2章は、幕府再末期に行われたイギリスへの留学とその成果について述べる。敬宇は自ら志願して学生の監督として留学団に加わった。自らも英語の学習に精魂を傾けて、帰途にはスマイルズの **Self Help** のかなりを暗唱するに至った。その成果は、帰国直後に徳川家の移転した静岡で著された「敬天愛人説」に示されている。彼はその前編で、「敬天」「愛人」それぞれの典拠を儒教経典の中から取り出し、後編で自説を展開した。その要点は、「天」は「父」のごとく吾を生んだものであるから、これを敬すべく、「人」は吾と同じく「天」の生んだ兄弟だから、これを愛すべし、そうすれば人々は「徳行」に励み、国は盛んとなるだろうというものである。従来、これはキリスト教の「父なる神」を意識し、原始儒教の「天」観念を援用したという解釈がなされてきたが、著者はむしろ、朱子学の三綱・八条目の枠組みを基礎とし、そこから統治者・被治者の区別を取り除いて、女性を含む「人」一般の道德を導き出した点が重要と説いている。

第3章は、「敬天愛人」を提唱した理由を翌年の『請質所聞』を分析して探る。ここで敬宇は、敢えて、朱子学が批判する「罪福の説」、すなわち「天」あるいは「上帝」による「人」の賞罰を教説の核に据えることに踏み込んだ。敬宇によれば、「上帝」すなわち「天」は「造化の主宰」であって、無形・無限かつ全知・全能の存在である。他方、「人」は「天」の一部を分有するゆえに「善」への端を持つ。「上帝」は人の善行を観察し、必ずそれに「福」を以て報いる。現世では、司馬遷の記した「天道、是か非か」という嘆声のように、善人が悲惨な境涯に陥り、悪人が栄えるといったことも生ずるが、霊魂は不滅であるから、長い時間の中では、「上帝」は善人に永世にわたる名声という「真福」を与える。それゆえに、「上帝有るを知る」ならば、「人」はどんな艱難にも、死の恐怖にすら打ち勝つことができる。このような教説を立てた敬宇は、様々な「教法」にも寛容であった。仏教、「野蛮の民」の偶像崇拜、日本の神道、それぞれに「上帝有るを知る」端緒を持つとして評価したのである。

さて、『請質所聞』を記した翌々1871年、敬宇はサミュエル・スマイルズ原著『西国立志編』とジョン・ステュアート・ミル原著『自由之理』を立て続けに刊行した。著者によると、これらは単なる翻訳書ではなかった。第4章では、『西国立志編』を取り上げ、各巻の冒頭や巻末に敬宇が記した序や論を分析する。そこで浮かび上がる敬宇の意図は、英国の人物伝の紹介を通じて、「開化文明」の実現に個々人の「品行」を高めようとする努力の集積が不可欠だと訴えることにあった。敬宇はスマイルズがキリスト教を基礎に描き出した「自主」の人格を、朱子学の「修養」に励む人間像に読み替え、それを自らの「敬天」の思想で裏付けた。他方、この書で敬宇は、朱子学の枠組みを改めて、君主の役割を限定的に捉えている。開化の主人公は「自主」の精神に富んだ「民人」であり、したがって「君主」は人民という乗り手の意向に従う「御者」に過ぎないと述べたのである。

第5章では、続いて公刊された『自由之理』を論ずる。前作で強調した「自主」の人々が築くべき相互関係が主題であった。従来、この翻訳書については、誤訳や改変などがしばしば指摘されてきた。著者はしかし、原文と訳文の差異に敬宇の思想を読み取る。その典型はミルの *society* を「仲間連中即ち政府」と訳した点である。ミルは、政治的自由の達成後の時代に社会的自由、多数による少数への干渉の抑制を説いたのであるが、敬宇は多数対個人の対立を政府対人民の関係に置き換えた。著者はその理由を、本来互いに愛し合うはずの人が他人の「自由」を抑圧する可能性を想定できず、したがって、自由を阻害するものとしては、共同体の上に立ってこれを運営する「政府」ないし「仲間連中」しか考えられなかったからだと解している。他方、敬宇はミルと同様、良き社会を築くには *individuality* 「独自一己」の尊重が必要であり、したがって「各個殊異」を重んずべしと説いたという。著者はさらに本書末尾で敬宇の漢文自序が原著にない「愛」という主題を掲げていることに注目し、そこに敬宇の「開化」論の核心を見出す。開化の世は、ミルの説く抑制的な「自由」の原理だけでなく、高い道德性と人々の協力を導くべき積極的な「愛」の原理が必須だったというのである。

さて、第6章は、中村敬宇における「教法」および「漢学」の意味を考察し、それによって本論文を結ぶ。明治7年にキリスト教の洗礼を受けた一方、敬宇は終生、三位一体やイエスの復活について語らなかった。著者は、この一見不可解な態度を、その「敬天愛人」という基本思想によって解釈する。敬宇はキリスト教を信仰対象としてはいなかったが、「上帝」の存在に対する「信」という点で共感し、人を善行に導く効用という点で高く評価し、そのために外国人を装って天皇に受洗を勧めたり、君父の権威を傷

つけるものでないと擁護したり、「婦人」に「安楽」を与えるものとして推奨したりしたのである。他方、儒学に関しては、敬宇は終生、「古今東西」を通ずる普遍の真理と信じ、これを説いてやまなかった。漢学の实用学化を批判して「経典」教育の復活を主張したり、ユニテリアンに共感してエマソンの翻訳書を刊行したり、起草を依頼された教育勅語の草案で天皇の箴言を「天」によって基礎付け、道德の根源に「畏天敬神ノ心」を置いたりしたのである。

以上が、本学位請求論文の要旨である。

本論文は、明治初期の著名人でありながら、従来の研究では曖昧かつ中途半端なイメージで捉えられてきた中村敬宇について、その漢文著作に本格的に取り組み、その結果、彼が儒学者として一貫した、かつ時勢に即した知的営みをしていたことを、初めて内在的かつ体系的に明らかにした。西洋的「近代」の枠組みからは奇異に見えるその主張や行動は、東アジアの儒教的伝統を背景において読み直すと、「開化」のために朱子学を発展させる営みとして整合的に理解することができる。その視点に立つとキリスト教との関係や「誤訳」など、歪みと見えたことも筋が通ったものとして見えてくる。これは今日までの思想史研究を一新する独創的な貢献と言って良い。他方、こうした発見は、静嘉堂文庫などに架蔵された手稿本を丹念に読み解くことから達成された。韓国のハングル世代の留学生が漢文著作に取り組み、正確な日本語訓読文を作りながら、妥当な解釈を施してゆく努力は並大抵ではなかったはずである。また、独創的な解釈を提出する一方では、先行研究にも広く眼を通し、的確な論評を加えている。これも研究文献としての質を高めるものと言って良い。

とはいえ、本論文にも瑕疵なしとしない。テキストの内在的解釈としては優れているものの、それが生み出された時代背景、とくに明治維新という政治的激変との関連があまり明確に見えてこない。また、同時代を生きた他の知識人との比較も少なく、望蜀の感がなくもない。

しかしながら、本論文の明治日本研究、さらに東アジア研究への貢献は、疑いもなくその弱点を大幅に上回っている。したがって、本審査委員会は、本学位請求論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。